

平成29年度 研究計画

五泉市立村松小学校
知育推進委員会

【研究主題・副題】

主体的に関わり合い、学びを深める子ども（3年次）

～ 「一人一人が考える授業」を求めて ～

1 主題設定の理由

(1) H27.8.26 文部科学省 教育課程企画特別部会「論点整理」p16～より

『次期（学習指導要領）改訂の視点は、子供たちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるもの全てを、いかに総合的に育てていくか』が求められている。

- ① 「何を知っているか、何ができるか」（個別の知識・技能）
 - ・各教科等に関する個別の知識や技能（身体的技能や芸術表現のための技能等も含む）
- ② 「知っていること・できることをどう使うか」（思考力・判断力・表現力等）
 - 問題発見・解決や協働的問題解決に必要な思考力・判断力・表現力
 - ・既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせ、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考（思考力）
 - ・必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意志決定（判断力）
 - ・伝える相手や状況に応じた表現（表現力）
- ③ 「どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか」（学びに向かう力、人間性等）
 - 主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力）
 - ・自己の感情や行動を統制、思考の過程を客観的に捉える力（メタ認知）
 - ・協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやり（人間性）

このように、次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要である。つまり、子どもたちが「どのように学ぶか」が大切なのである。このように、主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善を目指し、本主題を設定した。

(2) 新潟県 H29 年度学校教育の重点から

郷土愛を軸としたキャリア教育の推進が求められている。これは各教科等で、現在及び将来の自分の姿を結び付けて学ぶ意義を理解させ、学ぶ意欲を高めることをねらっている。このことは「主体的にかかわり、主体的に学ぶ」子どもの姿の実現につながる。

(3) 教育目標の具現化から

当校の教育目標は「学び合う子 明るい子 チャレンジする子」である。知育の目標である「学び合う子」とは、ともに学び合い、一人一人が確かな学力を身に付けることである。そのために、地域とかかわり、夢（目標）に向かって、ねばり強く努力する子どもを育成していくことが必要である。

(4) 今日の課題から

現在の学習指導要領では思考力の育成が求められている。なぜなら、これからの社会が、知識や情報を再構成し、そこに傾向や偏り、関係などを見出す思考力を必要としているからである。言語活動の充実はそれ自体が目的ではなく、思考力の育成に向けた手立てと考えることができる。「知識基盤社会」のこれからの時代は、たくさんの知識や情報をいかに活用できるかが、問われている。そのためにも、どのように思考させるかが重要である。思考ツールを活用し、一人一人の子どもに思考力を育成したい。そこで、副題に、「一人一人が考える授業を求めて」と設定した。

(参考)『思考ツールの授業』小学館 田村学 黒上晴夫 著

(5) これまでの研究から

昨年度、研究主題『主体的にかかわり合い、学びを深めるこども』の具現に向けて、「選択」と「決定」の学習場面を位置付けながら実践に取り組んだ。その結果、以下のような成果と課題が明らかとなった。

(ア) 求められる学力とその実態の共有

日々の授業において、授業づくり計画書に基づいた授業設計が重要である。そして、学力実態を考慮し、授業研究までのサイクルを日々の授業改善に活用していくことが有効である。

(イ) 授業改善の視点

○「課題の吟味」について

教える場面では、既習事項の理解を確認できるねらいを設けた。考えさせる場面では、既習内容との比較、二者択一の問題、児童に身近なテーマを取り上げる等をして、児童の意欲を高めた。違和感「気になるな」、必要感「何とかしたいな」、矛盾「解決したいな」というような、身に迫った切実感のある課題を設定できるように、本年も課題の吟味を検討する。

○「関わらせ方」について

まずは、「自分の考えをしっかりとめさせること」が前提となるので、その時間を確保した。また、児童が自ら関わりを求めるのは「ここまでは分かるけど、どのように考えたらよいか困ったとき」、「自分の考えが正しいのか判断したいとき」、「他にどんな考えがあるか知りたいとき」などであったので、その関わる必要性を感じさせることが大切であることが分かった。また、グループで関わる時に、思考ツールを活用したことで、互いの考えを整理することが容易になった。今年度は、関わらせる目的意識を授業者がもつことはもちろん、子どもたちにももたせていくことが必要である。

○「選択・決定の位置付け」について

選択・決定の場面は授業の中で複数の場面に位置付けられることが分かった。課題解決に向けた見通しをもつ場面、ペアやグループで話し合った後やまとめの後の自分の考えを修正・見直す場面などである。1単位時間の中に、自己決定の場面があることが、主体的な学習参加を促すことにつながるので、今後も自分の考えや方法を明確にする場を学習活動に位置付けていくことが大切である。

○「振り返り」について

文字言語を活用して、学びを頭に刻むことが、達成感や充実感につながるということが分かった。今日の学習で「分かったこと」「友達の考えのよさ」「自分の考えの変容」などを、板書されたキーワードなどをもとに、学年の発達段階に応じた視点を設けて振り返りをさせるとよいことも分かった。今年度も振り返りの時間の確保ができるように、教える場面と考えさせる場面の区別、指導の重点化を行う必要がある。

(6) 児童の実態から

全国学力学習状況調査や学習指導改善調査等の結果をみると、国語では、目的や意図に応じて図表やグラフを用いて自分の考えを書く設問や、表現の仕方について語源する設問で、正答率が低い傾向があった。自分の考えを、条件を与えて書かせる、必要な情報を根拠を基に選択させる、という経験を積ませることが必要である。また、算数では、グラフを読み取り、示された事柄の理由を説明するという設問に弱さが見られる。式の意味を説明したり、グラフから分かることを伝え合ったりする活動を大切に指導していく必要がある。

2 目指す子どもの姿

本研究で目指す児童は「主体的に関わり合い、学びを深める子ども」である。主体的に関わり合うとは、自己の個性を發揮しながら、他者の個性も尊重し、コミュニケーションを図り、協力・協働してものごとに取り組むことである。具体的には、「課題と向き合う」「対象と向き合い、気付き・感じる・考える」「他者とよりよく関わる」「人や自然・社会と関わる」ことと考える。

学びを深めるとは、個々の考えについて話し合う、ペアやグループ活動を通して、話し合いを活性化し、新たな考え方を獲得することである。具体的には、「課題をつかむ」「主体的に課題を追究する」「自分の思いや考えを持つ」「友達と感じたことや考えを共有し練り合う」「新たな課題を追究する」「自分の学びを見つめる」ことと考える。

3 研究内容と方法

(1) 研究教科 各教科及び道徳 (個人で設定する)

<研究内容>

昨年度の研究を受けて、「課題の吟味」(主体的な学び)「関わらせ方」(対話的な学び)「振り返り」(深い学び)の3つの授業改善の視点から、指導の在り方を探る。また、その際に、必ず一人一人が「選択・決定」する場を確保して思考力を高めるとともに、充実感や達成感を味わわせていく。

<方法>

* 3つの視点からの学習過程を改善した授業実践を行う。

(1) 課題の吟味

問題解決学習を通して獲得した力を活かし、さらに活用場面を設定して「気になる」「解決したい」と、子どもが自ら学びたいと思う課題を吟味する。

(2) 関わらせ方

ペア、グループ、全体で、いろいろな関わり合いをもたせ、思考力・判断力を育てていく。そのために、以下の3点を考慮する。

- ① 関わる必要性(なぜ話し合うのか)をはっきりさせること
- ② 考えの根拠をはっきりさせて互いの情報を提供し合うこと
- ③ 「思考ツール」を用いて関わり合うこと(※思考ツールについては、資料参照)

(3) 「振り返り」

学習内容や方法について、自分や友達の学び方(内容と方法)を振り返る。今日の学習で「分かったこと」(内容認知)「できるようになったこと」(方法認知)「友達の考えのよさ」「自分の考えの変容」(学習状況の認知)など、視点を設けて振り返りをさせる。振り返りの視点は、発達段階に応じて設定する。

振り返りの時間を確保するために、教える場面と考えさせる場面を明確に区別し、教える場面を短時間で押さえ、考えさせる場面に時間をかけるようにする。教える場面を短時間にするために、教師が指導内容を重点化して取り組むことが必要である。

* 「選択・決定」場面の位置付け

一人一人が課題と正対し、自分の考えをもち、何を学んだかが自覚できる場を設定する。

- ① 自分の考えや方法を明確にする場面
- ② 複数の方法から選択する場面
- ③ いろいろな友達の考えと比較して自分の考えをはっきりさせる場面

(2) 授業研究

(ア) 公開授業について (公開授業を一人2回行う)

授業研修	対象・回数	指導者	時期	参観者	指導案検討会	模擬授業
①全体研修	各(低・中・高) 学年部より1回	指導者を 招聘	6月 11月 12月	全職員	学年部 (知育推進)	全職員
	UDLの授業研 修(1回)	管理職	4月	全職員	研修内容は、知育部で立案	
②学年部研修	全体研以外の 担任 1回	管理職 又は、 指導者を 招聘して もよい	2学期	管理職 学年部	学年部 特別支援部	学年部可
③学年研	全員		1学期 (2学期)	管理職 学年	学年 特別支援部	学年可
その他研修	12年研 市小教研など					

①全体研修について

- ・各学年部より1名が1回実施する。(計3回)
 - 1回目は6月30日(金)の桜中学校区授業公開(村松小)下越計画訪問<雑賀>
 - 2回目は11月1日(水)の下越指導主事要請訪問(理科)<菊池>
 - 3回目は12月1日(金)の市教委指導主事学校訪問<黒田>
- ・4月のUDLの研修は、知育部主催で行う。
- ・指導者を招聘する。
- ・1～2学期に実施する。日程は、個人で設定した教科をもとに知育推進委員会で調整決定する。(5限の実施を中心とする)
- ・指導案検討会は、それぞれの学年部が中心になって行う。「模擬授業」形式とし、教科の目標に迫る課題設定になっているか、子どもの学びの筋道に沿った授業がデザインされているか等を検討してもよい。
- ・授業者は、学習指導案(A4判2枚)を作成する。指導者に1週間前に送付できるように作成する。
 - ※事前に提出するもの
 - 学習指導案・授業づくり計画書・資料(単元・教材文など教科書のコピー)
- ・指導案検討会、公開授業、協議会準備は、授業者の所属する学年部の知育推進委員が中心になって行う。

- ・授業者は、座席表および修正指導案を用意し、授業日当日に参観者に配布する。
- ・協議会については、ファシリテーションの手法を用いながら、3つの視点「課題の吟味」「関わらせ方」「振り返り」について、成果と課題を話し合う。

②学年部研修について

- ・2学期に実施する。日程は、授業者の希望を受け、知育推進委員会で調整する。
- ・全体研修にあたっていない担任が1人1回実施する。
- ・指導案検討会については、学年部で行う。
- ・模擬授業を取り入れ、実践的な研修に努める。
- ・指導案は、全体研究授業と同様とする。
- ・授業協議会は、学年部で行う。
- ・特別支援部も、児童の実態に合ったテーマを決めて授業を公開する。

③学年研について

- ・授業づくり計画書をもとに1学期に実践する。(略案とする)

(イ) 指導案検討会について

- ・1学期の公開授業や全体研修会を受けて、夏季休業中に学年部全員で実施する。
- ・各自、指導案を持ち寄り、模擬授業を取り入れ、実践的な研修に努める。(夏季休業中)

(ウ) 「まなびのたより」について (全体研と学年部研のみ作成)

- ・授業終了後、協議会で明らかになった成果と課題について、授業者の同学年参観者がまとめる。
- ・授業者からの振り返りも一言加え、授業終了後、2週間以内に全職員に印刷・配付する。
- ・写真掲載は授業後の板書のみ。(学年部で忘れずに記録すること)

(エ) 指導者について

- ・原則として、全体研修(計3回)においては、指導者を招聘し指導を受ける。
- ・学年部研修(計10回)については、原則管理職とするが、指導を受けたい指導者を招聘することができる。

(指導者) 下越教育事務所 五泉市教育委員会学校教育課 指導主事 その他

(オ) 「授業作り計画書」の作成について

- ・児童の学力実態や、基礎的環境整備の視点から、目指す授業像や児童像を設定する。
- ・重点教科や単元、授業研修日を設定する。
- ・日常的な授業作りの方策を記入する。
- ・「授業作り計画書」は、日々の実践の評価をもとに、方策を修正していく。

<研修の流れ>

- 4月～5月 ・研究計画をもとに、授業づくり計画書を作成する。
- 4月 ・全校でのUDL研修会を実施し、村松スタンダードの確認をする。
- 5月～7月 ・学年研授業を実践する。
- 6月 ・全体研や校内研修会を実践する。「まなびのたより」の作成
- 8月 ・全体研、学年部研に向けた指導案の作成を行い、学年部で指導案を検討する。
- 9月～12月 ・全体研（2回） 11月と12月
- ・学年部研 9月～12月
- ・「まなびのたより」の作成
- 12月～1月 ・「研修のまとめ」の原稿作成

<個人のページ>

- 1 授業づくり計画書
- 2 全体研 or 学年部研指導案
- 3 まなびのたより
(同学年授業者の考察を行いながら、自己の実践を振り返る)
- 4 研修のまとめ (授業作り計画書に対しての振り返り)

- 2月 ・研修全体会（今年度のまとめと次年度の方向性検討）
- 3月 ・「研修のまとめ」の印刷依頼・完成

<資料>

思考スキルと思考ツール

小学校では19の思考スキルを想定しておけばよい。思考スキルはそれぞれが相互に関連している。思考スキルと思考ツールは1対1で対応するのではなく、一つの思考ツールは、様々な思考スキルと関係する。また、思考ツールでは対応できないと思われる思考スキルもある。

<具体的場面>

ある課題について、思考ツールを用いてみんなで話し合う活動を行うと、子どもは思考を働かせながら、自分の考えをより深めることができる。

<思考ツール>

- ・ベン図 ・ボックスチャート ・フィッシュボーン ・wチャート
- ・同心円チャート ・メリットデメリットチャート ・クラゲチャート
- ・PMIチャート ・vチャート ・くま手チャート ・ウェビングマップ
- ・二次元表(マトリクス) ・座標軸(4象限) ・Xチャート
- ・エリアチャート ・ピラミッドチャート ・スケールチャート

思考スキル	思考ツール
①多面的に見る	Xチャート Yチャート Wチャート、くま手チャート、PMI
②順序立てる	ステップチャート、プロット図
③焦点化する	ピラミッドチャート
④比較する	ベン図
⑤分類する	ベン図 座標軸
⑥変化を捉える	表 座標軸 同心円チャート
⑦関係付ける	コンセプトマップ(概念マップ)、表
⑧関連付ける	コンセプトマップ(概念マップ)
⑨変換する	該当なし
⑩理由付ける	クラゲチャート、フィッシュボーン
⑪見通す	キャンディーチャート、フィッシュボーン、KWL
⑫抽象化する	ピラミッドチャート
⑬具体化する	該当なし
⑭応用する	該当なし
⑮推論する	キャンディーチャート
⑯広げてみる	ウェビングマップ(イメージマップ)
⑰構造化する	プロット図、ピラミッドチャート、フィッシュボーン、バタフライチャート
⑱要約する	ステップチャート
⑲評価する	KWL、座標軸

<参考文献>『思考ツールの授業』小学館 田村学 黒上晴夫 著

*各学年部に、参考文献があるので、活用すること

村松小授業構成図

◎ 主体的に関わり合い、学びを深める子ども

教
え
る

資質・能力

目指す力に対する児童の実態把握

課題の吟味

- ・主体的な学び
- ・身に付けたい力の確認

- 身に迫った切実感のある課題と提示方法
- 課題の把握
- 課題解決の見通し
- 考えるために必要な既習事項の確認

○情報の選択と自己決定

考
え
さ
せ
る

関わらせ方

- ・対話的な学び
- ・思考ツール（可視化、操作化）

- 関わる必要性と目的
- 異なる多様な他者との対話
- 根拠をもとにした情報の提供

- 全体での検討、関連付け
- 自分の考えの見直し、修正

○情報の選択と自己決定

振り返り

- ・主体的な学習
- ・自己評価

- 学習内容の評価
- 言語活動を活用して熟考する
- 次の学びに向かう力

U
D
L
・
言
語
活
動
・
聞
く
話
す
ス
キ
ル